

南木龍江の医学思想

西巻 明彦

日本歯科大学新潟生命歯学部医の博物館

南木龍江(1757~1819)は龍野藩の藩医であり、南木玄益が藩主脇坂安照に仕えたことを祖とし、中行、義行、龍江と続いている。龍江の祖である南木中行は後藤良山に師事し、その医術は龍野藩のみならず近隣諸国からも患者の依頼があったほどだという。南木義行はその墓誌銘に「技術精研、慶奏奇効」とあり、奇なる独創的療法を施したという。竹下喜久男氏によれば「中行・義行二代の活躍によって南木家が龍野藩周辺で得た名声は医家としての地位を揺るぎないものとした。」と述べている。

このような恵まれた環境下に龍江は育ったわけであるが、その初等教育で股野玉川に師事し、『幽蘭堂年譜』(股野玉川の日記)にはしばしば記載が見られる。寛政6年6月28日の高山彦九郎一周忌に際し、玉川は8名の中の1人に龍江を呼んでいる。このように幽蘭堂に入門し、股野玉川の薫陶を受けたことは龍江に思想的に大きな影響を与えたと考えられる。玉川は20代前半に京古義堂へ遊学、さらに40代で玉田黙翁に入門している。その玉川の活動は高山彦九郎、徂徠グループ、正学派グループ、懐徳堂の関係など、浅井雅氏によれば「地域的つながりにおいても、江戸でもつながりにおいても学派横断的」と述べている。これは儒学のみならず閩呂庵が享和元年3月24日の日記に長崎遊学から戻った際には長崎の事情を聴きに訪問している。龍野藩医で池田瑞仙の高弟である和田謙堂も天明年間に長崎に遊学しており、外国の諸事情に一定の興味があったと推測することができる。また、龍野藩では遊学する者が多く、前述の和田謙堂は京の池田塾へ寛政5年9月25日に円尾玄東ら5名を引き連れ上ったことが『幽蘭堂年譜』に認められる。学問に対する熱意が龍野藩にあったことにより、南木龍江自身も『升堂門生録』によれば池田塾に入門しており、さらに皆川淇園の塾にも寛政6年8月15日(有斐齋受業門人帖)に入門している。しかも『載書』によれば寛政11年11月18日に大槻玄沢の芝蘭堂へ入門した。玉川と同じように龍江も学派横断的である。

南木龍江は享和3年『医法新話』2巻姫府米田町本荘輔二より出版している。さらに弘化3年浪花書林文虎堂より再刊されている。乾巻は主に医論、坤巻は症例報告である。基本的に龍江の刊本はこの『医法新話』のみで、『用薬神幾』、『傷寒論神幾』の広告が認められるが出版されなかったようである。乾巻の医論は最初に「李東壁本草綱目二歴代諸医ノ説ヲ載テ曰、人參五臓ヲ補ヒ智ヲ益シ身ヲ軽シ年ヲ延バシ人ヲシテ忘不令ト。和漢千百年來ノ諸医コトゴトク其説ニ迷惑シ。」と述べ、その誤りを指摘し、人參は元気を補うものではなく、元気を吹張する薬剤であると述べている。これは龍江の実証的経験からこのような説を唱えていると考える。

龍江は基本的には古方派でも後世方派でもなく病に対し固定化した処方を書き、患者にとって必要な処方を選ぶ神幾を強調している。さらに「長ク此二堯舜ノ天ヲ載カシメント欲ス。」とその目標を示している。坤巻は症例報告で難治の症例が多く、全部で五十一例が記されている。その中で「婦人二驚クコト有テ突然舌長ク吐キ久シクアラズ」と症例に対して龍江は患者を暗室に入れ静座瞑目させて、患者の前で焼き石に酒を注いで「病婦驚叫一声舌忽然縮収ス」と記している。薬の投薬のみではなく、このような奇なる独創的療法は父親義行譲りと思われる。このように、「学派横断的思想」は師である股野玉川から大きな影響を与えられたと考えることができる。